

日本におけるホメオパシー

創造性とスピリチュアリティーの勝利の凱旋

ハイルプラクティカーであるロジーナ・ゾンネンシュット女史が、東京のホメオパシー・アカデミーにてホメオパシー的ガン治療に関するセミナーを行い、そこで驚くべき発見をした。アジアの地で、ホメオパシー界の新人から学ぶべきことがあるということを知ったのである。

ロジーナ・ゾンネンシュミット

私は名だたる（海外招聘）ホメオパスの中で、初のドイツ人として日本のロイヤル・アカデミーに招聘されるという栄誉に預かった。2006年9月20～27日の滞在期間中、「ホメオパシーによる総合的ガン治療」というテーマで、東京で3日間のセミナーを開くために招待されたのである。セミナーは東京から発信して京都、大阪、福岡でも視聴することができるシステムである。ここでの尋常ならぬ経験にタイトルをつけるとしたら、標記のように「創造性とスピリチュアリティーの勝利の凱旋」にしたいと思う。同じ波長をもった人々、ホメオパシー治療に対して同じような関心を持ち、同じように努力する人々と出会った。私の故郷から8時間の時差と何千kmもの距離を隔てた場所ではあるが、私はそこに霊的に「里帰り」したのである。

同じスピリットを持った人々が、地球の裏側にいる

どんなこと待ちうけているのか全く見当もつかないまま、私は、創造力と強く深いスピリチュアリティーとともに表現される、素晴らしい人間的な温かさの中に降り立った。日本のホメオパスたちがどのように仕事をしているのか、どのようなことが彼らの興味をかき立てるのか、すべてが遠く思っていた。旅立つ前にわかっていたのは、ガン（などの難しい病気）のマヤズム治療について、そしてガンの背後にあるテーマと患者へのアプローチの仕方全般について講義してほしいと言われたこと。日本でのセミナーをしてみて、私は Heilkunst における個人的な仕事の仕方や患者との接し方を、これほど理解されたと感じたことはなかった。どこに行っても誰と話しても扉は開かれていた。私は基本的に何も説明する必要はなかった。ただ初めから終わりまでずっと、同じスピリットを持った人々と霊的に交流し、意見を交わし、そうすることによって道をどんどん進んでいくモチベーションを交換し合っただけである。私はまたホメオパシーにおいてここまで寛容な方向づけとここまで大きな、そして真の霊的な基盤に接したことはなかった。私が一番嬉しく思ったのは、日本でのホメオパシーが欧米やインドやらの流派のコピーなどではなく、自国の独自の文化のために適切な方向と実現方法を見つけるため、欧米やインドからインスピレーションを得ている、ということだった。たくさんの書籍が日本語に訳されている。ドイツ語や英語のわかる日本人が、自国のホメオパシーの発展に有益な書籍はないかと海外の書籍市場を見ているのである。こうして私の著書「Homöopathisches Krebs-Repertorium (ガンのレパートリー)」も彼らの目にとまり、日本語に訳されたのである。これは間もなく出版される予定である。私のマヤズムアプローチの仕方と、ガンにおける葛藤の解説が大きな興味をひき、この本の翻訳と私を日本へといざなうことになったのである。

それにしても日本のホメオパス達が総合的ガン治療の研究の最前線をこれほど把握しているとは、驚くばかりであった。Dr. Heinrich Kremer 著「Die stille Revolution der Krebs- und

AIDS-Therapie (ガンおよびエイズ治療の静かな革命) や Dr.Geerd Ryke Hamer の、脳の古代の葛藤とそれが脳に残す「複製」に関する理論、そして過去と最新のマヤズム理論等々をすでに研究しているというのである。しかし最終的にたどり着きたいのは、複雑な病気の実際的でシンプルな治療コンセプトと、慢性病の霊的・創造的な取り扱い方であった。日本のホメオパシーにおいては、ホメオパシーそのものと生命組織塩、そして独自に開発したスパジリックの製品を使うという治療コンセプトができていたのである。

日本的な影響

長年アジア的メンタリティーにふれ、長年の禅修業を通じて特定の分野における日本人のメンタリティーに慣れ親しんできたこともあり、私はあの有名なホスピタリティーと寛容さ、礼儀正しさ、完璧主義的傾向をもって組織する才能に長けた日本人に出会うことを予想していた。日本に行く前、文化面ではどのようなことに興味を持っているかと尋ねられたので、私は至極当然のごとく歌舞伎鑑賞と京都への旅行を所望していた。こうして「(What) 何が」私を待っているかはあらかじめわかっていた。しかし実際に出会った「How (どんな)」は並大抵ではなく、私に多くのものを与えてくれた。ホメオパシーの会社に頼まれ京都で私を案内してくれたタクシー運転手小西氏は、上品で洗練された、スピリチュアルな紳士で、静かな場所に行きたい、という私の願いをこころよく叶えてくれた。こうして私は観光客の波から離れた、古き日の日本の芸術家や僧侶が残した見事な寺社や庭を体験することができた。2日間で廻った場所は「たったの」4か所だったが、その控えめな美と一杯のお抹茶は、実にぜいたくな贈り物だった。本当の意味で魂の栄養になった。日本の文化には無償の贈り物を受け取る、という教えがある。私には、大げさな献身的パフォーマンスと、温かく心のこもった「贈る喜び」との区別がつく。後者を、私は日本のホメオパス達に感じた。

ある類まれなる女性によるバイオニア的業績

日本のホメオパシーにおけるこのような類まれなる精神を具現化させたのは一体誰なのか？それは、大学で美術を修め、テレビのジャーナリストをしていた由井寅子氏で、彼女は長年英国で生活している間に患ってしまった病気がきっかけでホメオパシーの治癒の力を知り、病気が治っていくと同時に、故国日本に帰ってホメオパシーの拠点を築くべし、という内なる声に気づいたのである。英国で5年間のホメオパシー教育を受けた後ホメオパスとして活躍していた由井氏は、東京に戻って以来11年間、疲れを知らぬ実行力と創造力で、小さなオフィスで少人数のグループを率いて日本におけるホメオパシーの基礎を固めてきたのである。官庁全体や製薬会社の事情、薬事法の状況、現代西洋医学の状況などには、ジャーナリスト時代から精通していた。一般人ホメオパスの法的な認知、ロイヤル・アカデミーの設置、最高の上流階級 自らホメオパシーの恩恵を体験していた の理解を得ることを、彼女は短期間に成し遂げたのである。彼女は医学界と競合しない形で感銘を与えた。従来の医学が壁にぶつかっている分野において自らの臨床上の成功の数々を示すことで納得させた。この偉業には、健全な戦闘意欲と並大抵ではない創造力が必要であった。優れた教育を受けたホメオパスの輪はたゆまずに広がっていき、彼らもまた慢性病のケースで多くの成功をあげつつあり、こうして日本の医療事情・癒し事情全体に新しい意識を出現させたのである。アカデミーのカリキュラムは社会人の環境や条件に合わせて組み立てられた：4年制のパートタイムコースまたは仕事を持つ人のためのイブニングコース、そして週3日のフルタイムコース、そし

て多彩な海外ホメオパスによるオプショナル講義。由井博士はホメオパシーの古典や基本的な書籍を日本語に訳し、また自らも英語と日本語で本を出し、やがて他にも翻訳者を集めるようになった。特筆すべきは彼女の寛容な精神だと思うのだが、彼女はずいぶん前にすでに日本語に訳されていたハーネマン著「オーガノン」を出版するのをためらっていた。ハーネマンは当時の医学界に対して批判的だった。しかし由井博士は従来の医学界とホメオパスとの対立を生みたくはなかったために、オーガノンの出版を控えていたのである。そこで私は、オーガノン日本語版の前書きにこう書くことを勧めた：ハーネマンの厳しい姿勢は当時のヨーロッパの時代精神から出たものだと理解でき、また § 287~289 がハーネマンの精神を理解するカギとなるだろう、と。ハーネマンはこれらのパラグラフを書かなくてもよかったはずである。メスマリスムの価値を彼なりの繊細さでほのめかしてあるだけだからである。しかしこのパラグラフは最後の版まで、上質のメッセージを携え、ホメオパシーの法則に関する膨大な科学的教えの一角に燦然と輝き続けている。

日本の道：靈的に、そして实际的に

日本では、ホメオパシーがこれほどに創造的で寛容で、そして靈的に伝えられているのはなぜだろうか。その答えはやはり由井博士の人格に帰するのである。深い信仰心を持ち、また芸術的才能にも恵まれた由井博士は、そのあふれんばかりの生きる喜びを別にしたとしても、確実に教え子達にその特質を引き継がせるような影響力がある。彼女は従来の型に囚われない人生を生き、そうすることで自国とその文化に本質的に貢献してきたのである。彼女はこう言った。

「日本人は日本人の問題を自分達で解決しなければなりません。解決策はすべて私達の文化の中にあるのです。しかしまず初めに、古い「侍精神」、切腹（面目を保つための自害方法）や神風意識のような破壊性が消えなくてはなりません。そのような姿勢を人に伝えることはできないからです。生き方のモデルになるように生き、我々のメンタリティーの、このような梅毒的・破壊的な側面とは無縁の道を見つけなければなりません。その道が、ホメオパシーなのです。もし誰かが非常に固い旧来の条件下から抜けて、ホメオパシーの道を通って行くと、その人は全く違った認識をもつようになり、柔軟になり自己認識ができるようになり、自分の人生と積極的に向き合い、また寛容になります。何も説明したりする必要はなく、ただすべてあるがままにすればよいのです。私達が抱えるたくさんのトラウマ、感情的抑圧、そして第二次世界大戦後の広島・長崎における惨劇を癒すには、私達のルーツを守る包括的な医療しかありません。だからこそ私達は、自らの問題をどう解決すべきかを他国の人にアドバイスしてもらうのではなく、いかに私達が素晴らしいものを持っているか、それもどんなにたくさん持っているかを見つめるのです。日本では人間を半分靈的、半分肉体的にとらえます。しかし誰もが、特に女性達が、健全な生きる意欲、健全な自己認識が必要なのだということを知る必要があります。その新しい意識を得るために、ホメオパシーは理想的な道であり、私達にとって理想的な医術だということが、私にははっきりとわかっています。私達の相談会を通じてホメオパシーで癒された人々は、考え方も変わり、行動の仕方も変わります。それは社会的階層とは無関係です。私達の4年制の学校でホメオパシー教育を受けた人達は、内面に確固とした靈的なものを持った、ポジティブ考え方をする創造的な治療家になります。私達に連絡をくれる人々はどんどん増えていて、仕事をしている傍ら熱心にホメオパシーを勉強しています。まずは自分自身のために。これが大事だと思うのです。まずは各

家庭内で健康維持、病気予防、子供のかかる病気、緊急事態などのためにホメオパシーキットを使う。そうすることがごく自然、当然になるべきです。こうして意識が根底から変わっていくのです」

国のための癒し

日本では、ホメオパシーは個人や個々の治療家が好んで使う、といったような癒しの方法などではない。ホメオパシーは自国と自国の文化、民族全体のために何かを成したいという強い願いが込められ、地に足をしっかりとつけているのである。その背後には、死を、そしてつまり生をも軽んじた侍的伝統の側面はもう時代にそぐわない、という認識がある。由井博士は、梅毒マヤズムとガン傾向の自己破壊エネルギーについて語っていた。鎧で覆われたように固い伝統をホメオパシーで破っていかうとは、何と壮大なアイデアではないか！勝利の凱旋の中で彼女は、政界や財界のトップレベルに、考え方や行動を変えろという選択肢もある、ということ、ホメオパシーのポジティブな作用をまず自ら体験することを勧めたのである。それはさしずめ、我が国のホメオパスの誰かが、アンゲラ・メルケル首相とその側近達に「我が国の国民達のために新しい健全な考え方ができるよう、ホメオパシーを通じて自己経験・自己認識をしてはどうか」と勧めるようなものである。これはぜひともやってみたいことではないか。由井博士は「ホメオパシーは本当に効くのか etc.」というありがちな質問や疑念には少しもとらわれることがなかった。その勢いのまま、10年という短期間でホメオパシーを急速に広め、あらゆる社会的階層出身の意欲旺盛なホメオパスを輩出してきたのである。その焦点は疑問ではなく、あくまでも自らの経験に裏打ちされた確信なのである。

意義深い出発点

由井博士によると、日本では頻繁に予防接種を受けさせるため、子供達がどんどんガン傾向を持って生まれてくるようになり、また出生率が低下する一方であり、破壊的な病気が急激に増えているという。そのため、マヤズム的ホメオパシー治療を最優先させることは、彼女にとって至極当然だったのである。

「ホメオパシーが認知されるべきなのは、それがアロパシー治療をはるかにしのぐ療法だからです。何の機械も使わず、患者の大群が出くわすおそれのある副作用もなく、生命を励ます療法だからです」

何という認識だろう！今、私達の国でも、ホメオパシーは効くか否かという退屈な議論やそれを証明しようとする無意味な税金の無駄遣いをやめようという、ダイナミックでポジティブな姿勢が（ようやく）起ころうとしていると思う。ホメオパシーには、ハーネマンの時代から数えきれないほどの成功例があり、これこそ未来への指針となるはずである。由井博士の例は、あれほどのハイテク国家・日本において生半可な療法を携えてはあれほどまでの業績は残せなかったであろうという、非常に教えに富んだ例だと思う。彼女にホメオパシーへの疑念が微塵でもあったら、あれほど盛況なロイヤル・アカデミーを設立することはできなかっただろう。彼女の旧来の型にはまらない、創造的な人格は、非旧来型の道を行くだけでなく、最も理にかなったことを実行するのである。それは「自らの経験を土台にして納得させる」ということである。

私も、技術者、財界人、役所勤めの一般人ホメオパス（医師でもハイルプラクティカーでもないが、ホメオパシー教育を受けた人）と話すことがあるが、そこからもはっきりわかる。彼らも皆、ホメオパシーでより健康になった、アロパシーでは太刀打ちできなかった長患いや重病がホメオパシーで治ったという経験を自らしてきた。だからこそホメオパシー志向に

なり、その発展を促進させようという意欲を持つようになったのである。

医療全般をホメオパシーでまかなおうとすると、もちろんそれは長い道のりである。しかし医学部の学生達がホメオパシーの学校もあるのだと知り、医師のホメオパシー支持者がどんどん増えている今、数年で一区切りのゴールにたどり着けるはずである。由井博士のダイナミズムの中でも印象的だったのは、彼女が目的に向かって戦闘態勢でいる「鉄の女」ではなく、女性らしさを輝かせていたことである。そんな彼女は家父長制の根強い日本において女性達の模範となっている。由井博士「抑圧の解決法は自ら女性として習得しなければならない。男性のコピーであってはならない」彼女は女性にも男性にも、色彩豊かに装うこと、仕事のほかにももっと生きる喜びを発展させていくことを勧めている。

彼女は「家族」というものをとても大事に思っている。「レメディーキット」を作り、ポーション別に色分けした。こうして知識の乏しい人にもどのレメディーのどのポーションが手元にあるのか、そしてどれを取ればよいのかがすぐわかるようになっている。由井博士の教育用書籍は創造力に富んでいる。彼女が自分で描いた絵が至る所に載っており、これで複雑な関連性を目で見て把握できるよう、そしてより鮮明に記憶できるようになっている。日本語でも英語でも出版されている最初の書籍、「ホメオパシー in Japan」には面白いイラストが満載で、それらが最重要レメディー達を表しているのである。私達西洋のホメオパスにとってはレメディーの本質について、所変わればニュアンスも変わってくるのだと知り、非常に啓発的であった。

さまざまなアプローチ方法が補い合う

前述のように、日本のホメオパスにとってはマヤズム治療のシンプルなコンセプトが中心課題である。そのため、Peter Gienow によるレブラ・モデルに基づいた私のマヤズムコンセプトは大きな共鳴を呼び、また私のシンプルな治療コンセプトには参加者の多くから、感動したとのフィードバックが寄せられたのである。しかし私は理論にあまり時間を割きたくなかったし、過去の症例だけを出して説明したくもなかったので、「ライブ」で2名のガンの女性患者とセッションした。参加者達にとっては、私が通常とは違った方法やレメディーを使うかどうかは全く重要ではなかった。初めて接触する患者とどのように向き合うか、どうアプローチするかがまず第一で、第二に彼女達が今、マヤズム的治癒の過程のどこにいるのかを私がどうやって見いだすかが重要だったのである。そのため私はまず潜在しているものを感じ取るため、繊細に接し、それから今のマヤズムレベルから出ている症状を確認した。症状については、その患者を診ていたホメオパスも同意した。こうして私の考え方や治療の仕方は、日本のホメオパス達の仕事の仕方と共鳴するものだとして改めてわかったのである。

また、彼らはガンの背景にある葛藤というテーマと、それを創造的にひも解き、癒しへと導くことに興味を持っていた。ガンは完全に凝り固まってしまう病気であることから、適切なホメオパシーのレメディーの他にもその人にまた躍動感と生命のリズムをもたらす練習をすべきだということは、日本の我が同僚達にも即座に受け入れられた。大きな共感を得たりリズム呼吸法は、私のセミナーの3日間、毎日1回簡単な練習が行われた。その後、非常に効果があったためホメオパシーセンター東京本部でも毎日練習していると聞いた。ロイヤル・アカデミーのメンバーは統合医療に高い関心を寄せ、また日本でもハイルプラクティカーが法的に認められるよう望んでいる。

日本でホメオパシーが急速に広がっていくのを見ることは、私達にとっても嬉しく、感動的である。このような仲間達とともに日本に滞在できたことは、私の人生におけるハイライトであり、人間的にも、専門分野でも、私にとって豊かな贈り物となった。